

ぼくは負けれん

沖野 友哉

準決勝までできた。あと二つ試合に勝てば、優勝できる。相手がぼくをにらんでくる。でも、今のぼくは目をそらさない。竹刀をぎゅつとにぎりしめた。(ぼくは負けれん)心の中でさげんだ。剣道を始めるときのぼくは弱虫だった。

三才上の兄は私立の学校に通っている。家から遠い学校へは、母が送り迎えをしている。朝は早いし、帰りはおそい。その上、土曜日も学校がある。宿題がいっぱいで、テストばかり。いい成績をとるためにじゅくへも通う。勉強、勉強、勉強がおいかけてくる。それがいやで、ぼくは家に近い公立の学校を選んだ。一つ下の妹は、兄と同じ私立の学校を選んだ。母はいそがしくなった。

「友哉、おきなよ。」

その声の数分後、車のエンジンの音がきこえる。エンジンの音より大きな母のどなり声。

「忘れ物ないで。」「早うしなさい。」「もう、何をしよう。」「兄たちをおこりながら、学校へ送って行く。」

夜おそくなつて、母がくたくたになつて帰ってくる。ぼくの顔を見るなり、

「友哉、宿題したん。」

ぼくは知らん顔をする。(それより先に「ただいま」とちがうん。「おかえり」もいえん。)

毎日がこんなくり返し。ぼくの心の中のトゲトゲがどんどん大きくなっていく。

あの日、ぼくの心がひめいをあげた。

ゲームをして遊んでいるぼくに、祖母が、

「友哉、宿題したん。お母さんが帰る前にしとかなあかんよ。」

いつもいわれている事なのに、どうしても腹が立って、自分がおさえられなかった。

「うるさいわ。ばばあ。」

一番の味方のばあちゃんにひどい言葉をぶつけた。祖母の方をむくことができない。(ぼくの居場所がなくなつた。)悲しかった。

だけど、それはちがつていた。祖母はぼくの心のひめいをしっかりと受けとめてくれた。そうして、ぼくは剣道と出合った。

練習試合に勝つただけで大喜びする母。その話をうれしそうに聞いている父。祖母はうつすら涙をうかべている。

「友哉、すごいなあ。がんばつたなあ。」

と応えんしてくれる兄と妹。ぼくの大切な家族。ぼくも、この家族の中にいるんだ。

今までぼくは、いろんなことから逃げだした。都合の悪い事は、だれかのせいにもした。だけど、もう逃げん。ぼくは戦う。(もつともつと、強くなりたい。)そう思った。

この大会が終わつたら、心配をかけた祖母と母に、謝ろうと決めている。応えんしてくれ大切な家族に「ありがとう」と言おう。

あと二試合、ぼくは全力で戦う。